

「医の道を求めて——ウィリアム・オスラー博士の生涯に学ぶ」

日野原 重明 著

日本歯科大学教授・内科

岡 安 大 仁

十数年前になるが、内科誌「medicina」に毎月『オスラー伝』を連載しておられた日野原重明先生に、初めからスクラップにして保存しておけばよかったと申し上げたところ、先生はいずれ本にするつもりだからと言われた。その後、「平静の心—オスラー博士講演集」や復刻版としての「医学するところ—オスラー博士の生涯」(岩波書店)は出されたが、あの10年間にわたり112回に及んだ『medicina』の先生の労作の完成本をこそ私は心待ちにしていたのである。このような想いは私ばかりではなかったと思う。

さて、あの連載に多くを追加し、面目を一新した本書を手にして、私は改めてオスラーの偉大な業績とその人格の前に言葉を失った。また同時に、全身全霊をこめてオスラーに傾倒し、オスラーを現代に生かし尽くそうとなさる日野原先生の情熱と絶大なエネルギーと後輩達への奉仕の精神に言葉を失った。先生は冒頭

に“日本の医学生と、医師、看護婦、そして医学に関心をもつ一般人にこの書を捧げる”と書いておられるが、オスラーの生涯を学ぶことこそ医の道を求めることだとの先生の生きた信念にほかならないと思うのである。

880頁に及ぶ本書は、オスラーがカナダのボンドヘッドに生まれてから、オックスフォードにおいて生涯を閉じる70年を克明に時代を追って、医学的業績はもちろんのこと、医学生への愛や恵まれた交友、また家庭、そのほかこよない人間的側面に至るまで余すところなく綴っている。本書がオスラー研究の極めて貴重な文献となっているのは当然とも言えようが、それ以上に、オスラーと著者である日野原先生との魂の交流を読者は感ずるはずである。いたずら好きだった幼年時代のオスラー、終生の愛読書となったトマス・ブラウン著「医師の信仰」との出会い、ドイツ留学と巨匠R・ウィルヒョウとの出会い、細菌性心内膜炎や

オスラー症候群などおびただしい業績、ベッドサイドこそ医学生教育の最たるものであるとの強調、更にアメリカ医学界から英国医学界のリーダーとなっていったオスラーの活躍など、どの頁も息を詰まらせるほどの魅力ある記述が続いている。そして一人息子リビアの戦死、その2年後の終焉に至る克明な記述は、偉大な人の生と死を読者に悟らせる。更に見逃せないのは、巻末にある先生の論文「ウィリアム・オスラーの死に関する哲学」である。これは、かの有名なAnnals of Internal Medicine (1993.4.15)に掲載されたもので、生と死あるいは生命倫理が大きな社会的関心事となっている今日、極めて貴重である。

いずれにしても、本書が医学生や医師・看護婦ばかりでなく1人でも多くの向学の人に読まれることを切望する。

● A5 頁904 図11 写真35 1993
定価4,944円(税込) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)